

2022 年度第 3 回研究会の報告

日時：2022 年 12 月 3 日（金）10 時 30 分から 12 時 10 分。

方法：Zoom 使用によるオンライン形式。

このたびの「COVID-19」研究、2022 年度第 3 回研究会は公開で開催し、部門構成員を含む 15 名程度の参加者を得た。今回は、中澤達哉先生（本学教授）が話題提供を行った。発表後、たいへん活発な議論が行われた。次回の研究会は、可能な場合、2023 年 1 月に、そうでない場合は 2023 年 4 月に開催する予定である。

以下に中澤先生のご執筆による当日の発表内容を掲げる。

コロナの時代の歴史学と歴史認識：Covid-19 の副作用としての「感染症の人種化」

中澤達哉

はじめに：問題の所在

世界保健機関の統計では、2022 年 12 月 1 日現在、新型コロナウイルス感染症(Covid-19)の世界累計感染者数は 6 億 3957 万 2819 人、死者数は 661 万 5258 人を記録している。感染が拡大した 2020 年初頭からわずか 3 年弱で数百万人の死者が出ていることから、Covid-19 の感染拡大は世界史上有数のパンデミックと言える。

Covid-19 感染拡大が今後の歴史学研究に影響を与えることは必至という感覚から編まれたのが、歴史学研究会編（中澤達哉・三枝暁子監修）『コロナの時代の歴史学』（績文堂出版、2020 年）である。本書は、ポストコロナ期を含めた現代歴史学に向けて、反省的論点の提示や新たな視点や認識枠組みの提示を趣旨とした。本書を企画した 2020 年 3 月の時点では、①感染症拡大の歴史的再検討と歴史学の位置、②医療史・公衆衛生史のなかでの感染症、③感染症をめぐる政治と社会の分断・緊張、④感染症による現代国民国家の変質、⑤感染症が照らし出す人権と差別、⑥感染症をめぐる格差・労働・ジェンダー、⑦感染症と歴史実践、という 7 つのテーマが認識されていた。

総論：Covid-19 による 11 の「副作用」

このうち①は、同年上半期までに、次の 2 つの論点「「グローバルノースの歴史学」の規定性」、「新自由主義とコロナパンデミックの相互依存関係」に絞られていった。現代歴史学の無意識を自覚させ、従来の認識に反省を促したという点で重要な意義を有した。

以上の 2 点を踏まえると、Covid-19 がもたらした社会への副作用は、以下の 11 に細分化することができる。(1)潜在する差別の表面化＝「感染症の人種化」、(2)「感染したアジア人」などという人種の特化、(3)難民・移民感染者に対する医療・健康政策、(4)難民・移民感染

者のバイオポリティクス、(5)感染拡大による国境管理の厳格化・保護主義の活性化、(6)生態系の変化と栄養条件の改善、(7)Covid-19 への対応の主体としての国民国家の復権および国民の境界の流動化、(8)「感染＝自己責任」という新自由主義的理解および難民・移民の感染に対する自己責任論の適用、(9)感染や災害を通じた政治権力による住民の国民化、(10)感染拡大に関する歴史的再検討、(11)非常事態宣言をめぐる各国政治権力の変動、である。

各論：Covid-19 の副作用としてのハンガリーにおける「感染症の人種化」

上記 11 項目のうち(1)(2)の「感染症の人種化」は、特にハンガリーで顕著に表れた。2020 年 3 月 31 日に同国で制定された非常事態法は、非常事態宣言を発する政治権力側の意図や選別が同宣言にアプリアリに含意されていること、そして、国家による保護の対象から零れ落ちる主体（イラン系の移民・移民希望者・亡命者）が存在したことを詳らかにした。コロナ禍に直面した政府が国民の「純化」に着手し、緊急事態の名のもとに国民の枠組みを（マイノリティを除外するかたちで）意図的に改編したのである。ウイルスを排除するように、国内に住む移民あるいは国境で待機させられる難民が国民（となる存在）から排除された。

おわりに：現代歴史学の課題

Covid-19 をめぐり政治と社会の間に緊張あるいは分断を引き起こした「感染症の人種化」は、現代歴史学に以下の 2 点を強く認識させた。①危機的状況における民主主義の機能不全、②国民の境界の恣意的な変更、である。現代歴史学に対して、民主主義や国民主権に対する私たちの惰性的な認識を根本から問い直すほどの総点検を求めているといえる。

本書『コロナの時代の歴史学』の刊行以後に発露した課題が以下の 2 点である。①現在、2 年半前と比べて感染者は 14.5 倍に激増し、死者数も約 6 倍を記録している。その分、新自由主義は惨事便乗型資本主義の装いをもっていっそう浸透した。現代歴史学はその浸透を観測しつつ、国民国家の復権によるナショナリズムの増長がどこまで進むか、それに応じて、生きづらさの感覚はどのように変容していくか、注視していく必要がある。

課題の 2 つ目は、本年 2 月 24 日以降、ロシア・ウクライナ戦争を目撃していることである。侵攻前の 2 月 13 日、ロシアの 1 日あたりの感染者数は世界でも群を抜いて高く、約 19 万人を記録していた。疫病と戦争の分かちがたい相互依存関係の存在に気づく。すでに本書では、疫病の蔓延に伴う国民国家の復権および疫病と戦争との親和性について指摘されているが、今後も現代歴史学はこの相互依存関係を新自由主義の時代的特性として検証していく余地が残されている。

以上